京都広告協会70周年記念事業
これからの30年 メッセージ募集

優秀賞

宇賀亮介「2056年、京都に入学する」

1989年、私は同志社大学に入学し、京都で学生生活を始めた。当時の京都には、街のいたるところに学生がいた。大学のキャンパスだけでなく、喫茶店や古本屋、鴨川にも、学生の姿があった。京都と学生は、切り離して考えることのできないものだった。
それから67年後の2056年。少子化が進み、18歳人口は大きく減っているだろう。大学数も学生数も、今とは違っているかもしれない。では、学生が減った京都は、もう「学生のまち」ではなくなるのだろうか。

私は、そうではないと思う。

京都には、大学の外にも無数の先生がいるからだ。伝統を受け継ぐ職人、僧侶、庭師、料理人、老舗の人々、祭や町の記憶を語る市民たち。京都の知は、大学の中だけでなく、一人ひとりの暮らしの中に蓄積されている。

また高齢化とは年を重ねた人が増えることだけではない。長い人生で得た知恵や経験が、街に積み重なっていくことでもある。学生が減る一方で、先生になれる人はむしろ増えていくだろう。

ならば2056年、京都そのものを大学にしてはどうだろう。寺や工房、町家や商店街が教室になる。教授だけでなく、市民が先生になる。そして18歳の若者だけでなく、30代の留学生、50代の会社員、70代の退職者、80代の高齢者まで、世界中から人が学びにやって来る。

中世ヨーロッパの大学も、先生と学生が集まり、学びの共同体が生まれるところから始まった。ならば京都でも、街に暮らす先生と、そこを訪れる学生によって、新しい大学をつくることができる。

2056年、私は85歳になる。その時、もう一度学生になってみたい。今度は大学の門をくぐるのではない。寺を訪ね、工房をのぞき、町家で話を聞き、若い人たちと一緒に学ぶ。学生のまちとは、18歳から22歳までの若者が多い街ではない。何歳になっても、世界中から人が学びに来る街なのだ。

67年ぶりに、私はもう一度、「京都」に入学する。